THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES

親鸞仏教センター通信

2016年9月1日発行
発行者　本多 弘之
編集・発行　親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0034　東京都文京区湯島２-19-11
TEL. 03-3814-4900　FAX. 03-3814-4901
e-mail　shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ　http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp
Facebook　http://facebook.com/shinran.bc

2016.9
第58号

子どもを海に投げ入れる

親鸞仏教センター研究員　青柳　英司

親になって初めて知ったのだが、生まれたばかりの赤ん坊は、笑うことすら知らないのだ。微笑んでいるように見えることがあっても、それは一種の生理反応であって、嬉しさや楽しさの発露ではないらしい。

けれど新生児も、泣くことは知っている。彼らは不快や不安を、泣くことで表現する。空腹だと泣き、眠くなると泣き、親が抱くのをやめると泣く。人の親になってみて、泣くべきことはこんなに多いのかと驚いた。

確かにわれわれが生きる此土は、忉利天のような場所ではない。穢土であり五濁悪世のなかにあると、仏教は教えている。それなら赤ん坊が、笑うことも知らずに泣くばかりなのは、娑婆の苦海に生きるという事実を、純粋に表現しているからではないか。そう思うことがある。そして子どもを苦海のなかに放り込んだのは、他でもない。「親」という存在ではないかと。

そもそも子どもたちは、自ら望んで生まれてくるわけではない。容姿も才能も境遇も、何一つ選ぶことはできない。しかも、常に有限な存在として、死という絶対否定にさらされている。これは、不条理だと言って良い。そうであるなら親になるということは、その不条理な生存を、子どもに強いるということだ。

人間に、そんな権利があるのだろうか？　親になるということは独善であり、罪なのではないだろうか？　そんなことすら、考えてしまう。

ただ、『無量寿経』のなかには、次のような言葉がある。

> 寿命は甚だ得難し。仏世また値い難し。人、信慧あること難し。もし聞かば精進して求めよ。法を聞きて能く忘れず、見て敬い得て大きに慶べば、すなわち我が善き親友なり。
>
> （『真宗聖典』50-51頁）

仏法を聞き信心を獲た者を、釈尊は私の親友であると述べるのだが、そのためには「寿命（人身の命）」を得るという困難を、まず突破する必要性が暗示されている。ここから見れば親は、子どもが仏法を聞く前提を整えた、と言えるのかもしれない。しかし、換言するなら、それは子どもが法に出遇わないのであれば、親は子どもにとって、苦を与えた存在でしかないということだ。

なぜ仏法に、そこまでの意味があるのだろうか。それは、仏法には人間が自我関心で築いたものを問い直す力があるからだろう。人間関係が希薄化する現代だからこそ、あらためて、仏法を聞いていきたいと思う。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」㊲

欲生心は如来の回向心

親鸞仏教センター所長　本多 弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの―『大無量寿経』を読む―」の第91回と第92回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、十八願成就文について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第90回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　越部良一）

■大悲心は深層意識にはたらいている

第十八願成就文の「願生彼国　即得往生」（『真宗聖典』44頁、東本願寺出版、以下『聖典』）、願生すれば即ち往生を得るということは、欲生心（よくしょう）が成就することだと親鸞聖人はおっしゃる。「欲生」というのは如来が衆生にわが国に生まれんとおもえと、勅命、命令してくださっているのだと。その呼びかけの場所は、実は本願である。本願の場所に来たれと。願生せよというのは、その願いに触れればたすかるのだ。だから曽我量深先生は、「信に死し願に生きよ」とおっしゃった。願生というのは願に生きることだと。

『教行信証』では「欲生はすなわちこれ回向心なり。これすなわち大悲心なるがゆえに、疑蓋雑（ぎがいまじ）わることなし」（『聖典』233頁）と。生まれんとおもえという勅命は、如来が大悲の心をもって衆生に回（めぐ）らし向けようとする心なのだ。その勅命は、如来自身が衆生に全部投げてきてくれる、如来の回向であると。

このことが私は、読んでも読んでも、どのような意味かわかりませんでした。けれども、結局わかるという理性の対象にはならないのです。われわれの煩悩の心では見えない。衆生の苦悩の闇をみそなわして大悲がはたらく場所は、私たちの存在の根の部分であって、上のほうで浮ついて生きている心の部分からは絶対に見えない。そういうところにはたらき続けている。このごろ、私はこれを「深層意識」という言葉で言ってみてはどうかと思っています。深層意識に大悲心がはたらいている。これは、われわれからは見えない。見えないけれども、私たちに何か勅命としてきていますから、それが何か突き動かして、教えを聞かせたり、本を読ませたり、仏法は何を言おうとしているかと気にかかってくる。そのようなものは、自分で気にかかるというより如来の勅命が動かしてくる。

欲生心、「わが国に生まれんとおもえ」という呼びかけは、如来の回向心なのだと。如来が私どもに恵んでくださっているお心なのだと。これは十方衆生に呼びかけている。十方衆生は、それに気がつかないで動いているけれども、本当は根にはたらいている。だから、教えを聞いてだんだんわかってくる。自分が生きていたのではない、如来のはたらきを聞けと、そのために私は生かされているのだと、眼が変わってくる。そう変わるのは自分で変わったのではない。如来の大悲の回向心がはたらいているのだと。そのように親鸞聖人は表現されるわけです。

■宗教的な転換を「往生」と言う

欲生心が成就するというから、終わりかと考えたいのですけれど、本願に終わりはないのです。

兆載永劫の修行に終わりはない。法蔵菩薩は歩み続ける。法蔵菩薩が歩み続けるということは、欲生心が歩み続けるということです。これは、寝ても覚めても私たちをどこかで支え、励まし、聞かしめていくようなはたらきが如来の欲生心であるという教えです。ですから、欲生心が成就するということは正定聚の機となることだと親鸞聖人はおっしゃる。われわれは、凡夫でありながら、間違いなく仏に成る位をいただけるのだと。単に凡夫として悲しい人生を生きているのではない。必ず成仏する、あるいは大涅槃を得る、そういう形で仏教が教えたような、苦悩の命を、苦悩を超えて生きるような智恵、生死即涅槃というような眼を開く智恵が、信心の智恵としてこの人生においてわれわれに与えられるのだということなのです。

これは、聞いても聞いてもよくわからない所があるのですが、本願に触れるということは、信心をいただくことにおいて生活が変わるということなのです。生活が変わるといっても、やっていることが変わるわけではない。ただ、やっていることを感じている主体が、自分が生きている意味が変わる。そうすると、辛いなと思って嫌々生きている命がありがたい。このような形でいただいて生きていけるこの一瞬一瞬がありがたいというように仰げるようになる。闇だなと感じていた人生が明るみを感じながら生きられるようになる。そうすると人生が変わるわけです。そのようなものが宗教的な転換です。それを往生と言う。

現在の相対的状況のなかに新しい眼をもつということは、なかなかわからない。現在進行形的に光に触れつつ生きていけることは、なかなかわからないし、上手く表現できない。それを親鸞聖人は、どれだけ愚かな身であろうとも、どのような境遇であろうとも、光に遇って生きていくことにおいてその意味が転換されるという宗教的生の喜びを、何とか苦労して明らかにしてくださったのだと思うのです。私としては、そのような宗教的な生命に触れることが、この人生においてあるのだと申し上げたいと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2016年５月～７月）―抄出―

■ 2016年

5 / 9　第91回（通算第142回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

5 /13　ご命日のつどい

5 /16　乗満寺公開講座（乗満寺）：大澤研究員発表「「親鸞」とは誰か―掴めないその実像―」

5 /19　第52回現代と親鸞の研究会「尊厳と思いやりが交響する財政―次の世代がその次の世代とつながるために―」慶應義塾大学経済学部教授：井手英策氏（文京区・親鸞仏教センター）

5 /22　第13回「仏教と近代」研究会（佛教大学）：大澤研究員発表「親鸞像の形成過程―「伝絵」から親鸞へ」

6 / 4　第24回日本近代仏教史研究会（立正大学）：名和研究員発表「清沢満之における「自力／他力」再考―「修養」という語に着目して」、長谷川研究員発表「清沢満之の前期思想について」

6 / 9　第92回（通算第143回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

6 /10　ご命日のつどい

6 /12　「宗教」と「社会」学会　第24回学術大会（上越教育大学）：大澤研究員発表「親鸞小説のなかの親鸞像」

6 /13　第53回現代と親鸞の研究会「宗教性を哲学者はどう考えるか」哲学者、早稲田大学人間科学部教授：森岡正博氏（文京区・親鸞仏教センター）

6 /20　乗満寺公開講座（乗満寺）：大澤研究員発表「『親鸞伝絵』に描かれた親鸞像―宗祖としての親鸞聖人―」

6 /24　第15回親鸞仏教センター研究交流サロン「現代と古典―「役立つ」学びとは？」筑波大学非常勤講師：川井博義氏、高校生からの哲学雑誌『哲楽』編集人：田中さをり氏（文京区・親鸞仏教センター）

7 / 3　第23回真宗大谷派教学大会（大谷大学）：中村研究員発表「『法然聖人御説法事』から見る「宗」と「血脈次第」の問題」、青柳研究員発表「善導の『大経』観」

7 / 9　東洋大学井上円了研究センター2016年度第２回研究会（東洋大学）：長谷川研究員発表「19世紀の宗教思潮からみる井上円了―ヴィクトリア時代の英国と明治日本―」

7 /22　第93回（通算第144回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）

※６月から新たに「『教行信証』と善導」研究会を青柳研究員が、清沢満之研究会を長谷川研究員が主催し開催。その他、英訳『教行信証』研究会、『西方指南抄』研究会を毎月１回開催。

掲載論文等

5 月　『近代仏教』第23号
名和研究員「清沢満之研究の道程―没後百周年という交差点」

6 月　『真宗教学研究』第37号
本多所長「欲生心成就の信」（講演録）
名和研究員「清沢満之における「忘」の意義―『臘扇記』を手がかりとして」
中村研究員「「機法一体」説成立の再検討―證空における「往生正覚倶時」説を中心として―」

7 月　長谷川研究員『リクール読本』（共著）

現代と親鸞の研究会

本研究会では、「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第52回

尊厳と思いやりが交響する財政

―次の世代がその次の世代とつながるために―

慶應義塾大学経済学部教授
井手 英策 氏

井手英策 氏

2016年５月19日、親鸞仏教センターにおいて、経済学者の井手英策氏をお迎えして「現代と親鸞の研究会」を開催した。氏は、格差によって分断された現在の日本の状況を憂え、人間共通の普遍的ニーズを満たすという財政戦略を提唱し、人々の社会への信頼を取り戻し、本当の意味で豊かな社会を実現すべく精力的に取り組んでいる。今回は「尊厳と思いやりが交響する財政」をテーマに語っていただいた。ここに、その一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　大谷一郎）

■私が目指す普遍性

宗教関係の団体に声を掛けていただくのが初めてのことで、とても光栄なことだと思っています。私は人間を区別することを可能な限りなくしたいと思って生きてきました。しかも、その区別の基準がお金ということならば、それに対しては異議申し立てをしなければならないと思っています。この考え方は弱者救済とはまったく違います。そして、恐らくこの考え方に一番近いのは宗教的な価値観ではないのかと思っています。

■現在の日本の状況

現在の日本は、大変厳しい状況に置かれていると思います。年収400万円以下の人たちが非常に増え、６割以上の人々が平均所得以下の貧困層になってきています。共働きの世帯が増えていますが、２人で働くようになったのに世帯当たりの所得は２割以上落ちています。２人で働くようになって所得が２割以上落ちるということは、ものすごいことです。私たちが思っている以上に日本人は確実に貧しくなっています。

また、いろいろなデータを見ますと、私たちは他の人間を信頼しなくなってきています。そして、自由、平等、愛国心、人権といった価値観、これらの価値観は、時には人間が血を流し、命を懸けて勝ち取ってきた重要な考え方ですが、その大切な価値観をほとんどわかち合えないようなバラバラな国民になり始めています。

■勤労国家レジームと自己責任社会

次に、なぜこのような分断された社会が生まれたのかということを述べたいと思います。私は、日本を勤労国家と名づけています。どういうことかと言いますと、所得倍増計画で有名な池田勇人は、勤労所得減税と勤労の能率を高めるための公共指導という政策をとりました。これは勤労者に所得税を返し、また、貧しい人には公共事業で仕事を提供することにより、自分で働き、貯金しなさいというわけです。戦後このような政策がずっと行われてきました。ですから日本人は、子どもの塾、学校、家の購入から老後の備えまで全部自分でお金を払わなければいけないということがわかっています。要するに、この社会は生きていくための「必要」を、勤労、働いて自分で何とかするというのが前提になっているのです。2000年代に自己責任という言葉が大流行しましたが、そもそも日本は自己責任社会なのです。生活の「必要」を勤労で満たすという自己責任社会を私たちはつくってきたということを、ぜひ記憶に刻んでおいてください。

しかし、日本の社会は1997年、98年あたりから大きく変わり、勤労国家の形が崩れていきます。非正規労働者の割合が増加し、世帯あたりの所得がこのあたりから下落します。従業員の給与は減らされ、貯蓄率も減少していきます。また、この時期に自殺者が激増します。要するに、自分で働き、貯蓄し、生活を守っていくという勤労国家が終わり、そのようななかで自己責任だけを問われる社会になってきているということです。

■普遍的現物給付は結果的に格差を是正する

普通、貧しい人にお金を給付する社会は、格差の小さい社会だと思われると思います。しかし、皆がお金を貰える国と貧しい人だけにお金を給付する国を比べるデータによりますと、貧しい人にお金をあげる国のほうが、格差は大きくなっているのです。貧しい人を助けようとする人間の善意は、もしかしたら格差の原因かもしれません。

実は、貧しい人を助けるのではなくて、すべての人に給付すると貧しい人ほど所得が改善し、格差が小さくなります。理由は簡単です。年収100万円の人に100万円あげてください。100パーセントの効果がある。年収１億円の人にはたったの１パーセントしか効果がない。ですから、貧しい人たちの所得が劇的に改善するのです。皆に配れば、高所得者の租税抵抗感も低くなり効果が大きいのです。すべての人が税を払い、すべての人が受益者になる。それでも、格差は小さくできるということに気づいたのです。

■目指すべき相利創発社会

家族の原理、つまり、社会は皆で助け合って生きていくものなのだ、という原理を地方自治体の地域のなかに広げ、皆で税を払いつつも、皆の「必要」を満たしていくような領域、信頼し合える仲間のような家族の領域を広げていくのです。つまり、お金で人間を区別するような領域を最小化するのです。教育を無償化したら教育扶助という生活保護がなくなります。介護を無償化したら、介護扶助という生活保護がなくなります。病院を無料にしたら、医療扶助という生活保護が要らなくなります。結局、人々の「必要」を満たしていけば、生活保護の領域は最小化されていきます。人々が助けられているという屈辱的な思いをするような領域は、最小化したほうがいいと思っています。そのためには、人々の「必要」を満たすことが大事です。社会全体で贈与の関係をつくり、困った人を助ける再分配ではなく、皆が受益者になっていくなかで、結果的に再分配が起きるという新しい財政のモデルをつくりだしていくのです。

自己責任社会にもう終わりを告げて、そうではない、相利、つまりお互いが利益になる、私も助かるし、あなたも助かるという関係のなかで共に生きていくという相利共生の社会をつくり、しかも意図しない、思いもしない形で結果的に、さまざまな問題が解決していくというような創発社会を目指していこうではないか、ということが、今日皆さんにお伝えしたいことなのです。

現代と親鸞の研究会　於：親鸞仏教センター

※井手氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第35号（2017年６月１日号）に掲載予定です。

井手 英策（いで えいさく）氏

慶應義塾大学経済学部教授

1972年生まれ。東京大学経済学部卒業。東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。博士（経済学）。東北学院大学助手、横浜国立大学助教授を経て、現在、慶應義塾大学経済学部教授。専門は財政社会学。

著書に、『高橋財政の研究―昭和恐慌からの脱出と財政再建への苦闘』（有斐閣、2006年）、『財政赤字の淵源―寛容な社会の条件を考える』（有斐閣、2012年）、『日本財政　転換の指針』（岩波書店、2013年）、『経済の時代の終焉』（岩波書店、2015年）など多数。

共著に、『分断社会を終わらせる　「だれもが受益者」という財政戦略』（筑摩書房、2016年）など多数。

本研究会では、「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第53回

宗教性を哲学者はどう考えるか

哲学者、早稲田大学人間科学部教授
森岡 正博 氏

森岡 正博（もりおか まさひろ）氏
哲学者、早稲田大学人間科学部教授

1958年高知県生まれ。1988年東京大学大学院人文科学研究科単位取得退学。1997年大阪府立大学総合科学部助教授。1998年同教授。2005年大阪府立大学人間社会学部教授。2012年大阪府立大学現代システム科学域教授。2015年早稲田大学人間科学部教授。大阪府立大学名誉教授。博士（人間科学：大阪府立大学）。担当科目は、バイオエシックス、現代人間学など。研究領域は、現代哲学、生命の哲学、生命倫理学など。

著書に、『生命への招待―バイオエシックスを超えて』（剄草書房、1988年）、『無痛文明論』（トランスビュー、2003年）、『生命観を問いなおす―エコロジーから脳死まで』（筑摩書房、1994年）、『決定版　感じない男』（筑摩書房、2013年）など多数。

共著に、『救いとは何か』（筑摩書房、2012年）など多数。

森岡正博氏は、あくまで自分の立場を「哲学」におきながら、自己のうちにある「宗教性」を肯定し、真摯（し）に向き合っている。哲学の立場に身を置きながらも、「宗教性」と言い表さざるを得ないものとは何か。現代においてこうした「宗教性」を既存の宗教の言葉に依らずに考え、表現していこうとするのが森岡氏の「哲学」でもある。

森岡氏をお招きした「現代と親鸞の研究会」（2016年6月13日）では、「宗教性を哲学者はどう考えるか」という講題のもと、三つの視点から問題提起をいただいた。ここにその一端を報告する。

（親鸞仏教センター研究員　中村玲太）

1 浄土真宗への関心と違和感

はじめに浄土真宗と戒律について素朴にお聞きしたいと思います。特に考えたいのが、「お酒を飲む」ということ。目新しいテーマではないとは思いますが、もともと仏教では「五戒」として、飲酒を戒めています。これをどう考えるのか。

このときに、例えばこうした議論を予想します。人間とは弱い者であり、飲まないほうがよいとわかっているけれども、やめられない。こうしたわが身が煩悩具足の凡夫であると自覚する。酒を飲むことを否定するのではなく、「飲んでしまう」という自覚からスタートする。ここに他力の救いが開かれるのであり、他力に依る救済と倫理・戒律とは次元が違う。このような考え方もあるかと思います。しかし、ここに違和感を覚えると同時に、これが浄土真宗的な教えの根本に繋（つな）がっているとも考えます。

少し話は変わりますが、真宗大谷派の死刑廃止の運動には非常に共感を覚えます。しかし、ここで問いたいのは、死刑廃止を訴える根拠はどこにあるのでしょうか。その根拠は、現代社会に生きている人間としての倫理から出てきているのであって、真宗の「宗教性」、親鸞の教えから出てきているわけではないように見えます。

これに対して、「真宗は仏教です」という回答が考えられます。仏陀は殺生を戒める（＝五戒中の「不殺生戒」）のであり、これにのっとるのだと。しかし、だとしたらなぜ同じ五戒中の「不飲酒戒」は問われないのでしょうか。救済と倫理の次元についてこれまでも議論されてきたことだとは思いますが、親鸞の教えの根本的な問題に迫るために問いかけておきたいと思います。

2 命の課題とペルソナ＝人格

宗教が命をどう考えるかは大きな問題ですが、私は「脳死」という問題にぶつかりました。この

「脳死」ということを世界中の多くの人が抱いている「心身二元論」の観点から考えますと、人というのは肉体と同時に精神の次元を有している。この精神は脳がサポートしている。そこで脳が働かなくなる＝脳がサポートしていた精神が失われる、ということであり、これを人の死とみなしてもよいだろう、というのが「脳死」の議論です。

しかし、脳死と判定された方のご家族には、心身二元論では説明できないリアリティを感じている方がいらっしゃる。多くの場面において、脳死になった家族に声をかける人がいる。その人に精神、意識はない。でも声をかける。「対話」をしている、とも言われます。

そのときの対話とは何か。私はここに第三の次元が開けていると考えます。それを「ペルソナ」（＝古代ギリシャ・ローマ世界では「仮面」の意）と呼びたい。ペルソナという概念の大きな特徴は、奥ではない表面性です。近代的「人格」が想定するように奥に隠れている内面を本質とするのではなく、ペルソナという表面性に本質を見るのです。ペルソナというものが、脳死になった体のどこかに立ち上がってきている。それと私が対話しているのです。対話するのは、意識でもなく、肉体でもない。第三の次元です。

私が思わず声をかけてしまうときに、声をかける力をペルソナのほうから私に引き出している。主従関係で言うと、ペルソナが主、私が従のときに、声をかけてしまう。これを対話と呼んでもよいのではないでしょうか。

しかし、このペルソナを手で触れうる実体としてはとらえない。相手との関係性、網の目のなかで、立ち上がってくるものです。その意味で、客観的な存在ではありません。かと言って、単に主観的な存在でもない。第三の存在なのです。これをどう哲学的に言い表していくかが私の課題です。

3 信じる／疑うことについて

デカルト（René Descartes 1596～1650）は、好きでものを疑ったわけではありません。この世のなかに、確かなものはあるのだろうか。確かなものを見つけるためには、確かではないものを疑う。これが「方法的懐疑」です。デカルトが見つけたかったのは確かなものなのです。そして、疑っている私の存在だけは疑えない、とする。しかし、これは前半部分です。後半部分は、神の存在証明です。私が理性により疑っていける、理性の完全さが備わるのは、これを与えたものが存在したということ。つまり、全知全能の神が存在する。このように考えていくのです。

現代と親鸞の研究会　於：親鸞仏教センター

ここからわかることは、人間はすべてを疑うことはできないということです。デカルトが明らかにしたのはむしろこうしたことだったのではないでしょうか。デカルトだけではなく、何かを考える、あるいは疑うときに、それを「下から支えている何か」を考えなくてはならないのではないか、と20世紀のヨーロッパ哲学は思索していきました。哲学はすべてを疑う。ただし、私が何かを疑えるのは、疑うという行為を支えているところの疑えないものがあるからだ、ということを哲学は炙（あぶ）り出してきているのです。

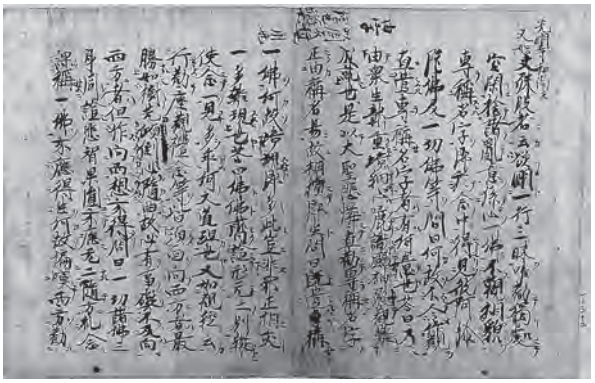
これと連関して考えるのは、「私は私が設定しているのではない世界を生きている」ということです。これこそ哲学の言葉で語れる「宗教性」ではないかと思っています。言語と論理によって、哲学を支えているところのものをどこまで炙り出せるか。これが哲学の営みでありますが、どこかで挫折を余儀なくされるのではないかと直感しています。しかし、哲学に課された使命とは、言語と論理によっていけるところまでいくことではないかと思っています。

※森岡氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第36号（2017年12月１日号）に掲載予定です。

「『教行信証』と善導」研究会報告

善導引文に注目して『教行信証』を読む意義

親鸞仏教センター研究員　青柳 英司



坂東本『教行信証』（東本願寺蔵）

親鸞仏教センターでは2010年以来、一貫して『教行信証』をテキストとする研究会が続いている。本研究会も同様に、『教行信証』の読解を通して、親鸞思想を現代に発信する基礎の構築を目指すものである。ただ、これまでの研究会は、『教行信証』の各巻にスポットを当てたものだった。しかし、本研究会では少し趣向を変えて、善導著作からの引文に注目し、読解を進めていく。そして『教行信証』における善導引文の意義と役割を確認し、親鸞が善導教学から継承した課題を浮き彫りにする端緒としたい。

そもそも善導は中国唐代の仏教者であり、中国浄土教の大成者と呼ばれた人物である。日本においても、親鸞の師・法然が浄土教へ帰依したのは、善導の『観経疏』を読み、その教えに導かれてのことであった。そのため法然は主著の『選択集』のなかで、「偏（ひとえ）に善導一師に依る。」（『真宗聖教全書』１・990頁）と表白し、また、「善導は是、弥陀の化身なり。」（『真聖全』１・993頁）とまで述べている。この点だけを見ても、善導思想が法然に及ぼした影響の大きさを、うかがい知ることができる。

そして、法然の弟子である親鸞においても、善導思想を重視する姿勢に変わりはない。例えば「正信偈」では、「善導、独（ひと）り仏の正意を明かせり。」（『定本教行信証』90頁）と讃嘆しており、また『浄土文類聚鈔』の「文類偈」では、「深く本願に藉（よ）って、真宗を興ず。」（『定本親鸞聖人全集』２・漢文篇・144頁）と、その業績を確かめている。また『教行信証』の場合でも、善導の引文は「教巻」を除くすべての巻に配され、引用回数も極めて多い。つまり善導の思想は、親鸞が『教行信証』のなかで扱う問題の多くに影響を与えていたと考えられるのである。事実、「行巻」では親鸞の名号釈を生み出し、「信巻」では三心一心問答の思想的背景を形成している。さらに「化身土巻」で展開される「顕彰隠密」の思想も、その淵源は善導にある。ここから見れば善導の教学は、親鸞思想に血肉を与えていると言っても過言ではないであろう。

しかし、その引文群の読解に関しては、未だに不十分な点が多く残されているように思う。例えば善導の著作は五部九巻の多くに渡り、そのすべてを親鸞は『教行信証』へ引用しているが、原典の文脈に対する詳細な検討はほとんどなされていない。そもそも伝統教学は善導の著作を、主著である『観経疏』（本疏）と、その他の四部（具疏）に区別してきた。そして、具疏のほうは「行儀」を説くものとして、あまり重視してこなかったのである。そのため『観経疏』を除く善導の著作は、近代以降ほとんど研究されてこなかった。しかし、親鸞自身は善導の著作に、そのような差は見ていないのである。

また、引文の構成についても、十分な研究はなされていないように思う。例えば「行巻」の場合、親鸞は善導の引文を受けて名号釈を展開しているが、その元となる「玄義分」の文章は、引文群の途中に配置されている。なぜ、直前に置かなかったのだろうか。このような問題についても、十分には検討されていない。

よって本研究会では、親鸞が見ていた善導像の復元を課題としつつ、『教行信証』における善導引文を読み解いていきたい。

清沢満之 研究会報告⑰

「他力門哲学骸骨試稿」再読

―新たな清沢満之の宗教哲学研究に向けて―

親鸞仏教センター研究員　長谷川 琢哉

本研究会では、今期より、「他力門哲学骸骨試稿」（以下「試稿」と略）をあらためて取り上げる。このテキストは、すでに本研究会の枠内で、伊東恵深元研究員によってあつかわれたものである。伊東氏においては、とくに「浄土真宗の教理」との関わり、あるいは「他力門仏教への帰依」という観点からこのテキストが精読された。今期では角度を変え、哲学・思想史的観点から「試稿」を読み解くという試みを行っていく。

近年の哲学者としての清沢満之の再評価は、今村仁司氏の研究に始まった。今村氏は「信念の人」としてのイメージが強かった清沢の「哲学者」としての側面に光をあて、『宗教哲学骸骨』や「試稿」のような「哲学的」諸論考を高く評価した。これにより清沢の哲学は広く一般に注目を集めることとなった。しかし今村氏の研究は、時に清沢の用語法を逸脱し、ほとんど独自の思想として展開されたものでもあった。また、哲学者としての側面があまりに強調されすぎたため、哲学と宗教をめぐる清沢の実際の歩みをとらえ損なうということも生じていた。

こうした研究上の問題を避けつつ、あらためて清沢満之の「宗教哲学」（あるいは「宗教」と「哲学」）の意義を問い直すこと。これが本研究会の基本的な目標となる。そして、そのためのアプローチとして、本研究会では、とくに哲学・思想史的な観点を導入したい。清沢満之の宗教哲学を適切に評価するためには、その思索と信仰がどのような文脈から生じたのかをできる限り詳細に明らかにする必要があるのではないか。清沢において西洋哲学と仏教との出会いが生じたとすれば、それは少なくとも彼に先行する歴史（言い換えれば「近代化」というグローバルな過程）のなかで起こったものである。そうした歴史のなかで清沢満之のみが問い、答えることができた問題とはいかなるものであったのか。そうした文脈をひとつずつ読み解いていくことで、はじめて彼の思索と信仰の独自性が理解できるのではないだろうか。

そして、このような視点は、本研究会が主題的にあつかう「他力門哲学骸骨試稿」の再読にとっても重要なものとなる。「試稿」において清沢は、哲学と宗教に対するそれまでの態度をあらため、明確に「他力門」の立場に立った思索を行うようになる。それは、自身の病を契機とした転回であった。しかし、「試稿」に始まる清沢の思索と信仰の転回は、彼個人の体験に還元しきれるものでもないだろう。実際、清沢はさまざまな機会に、明治仏教が進むべき方向について語っていた。そこでは「哲学」ではなく、「宗教」あるいは「信仰」に基づく仏教の必要性が歴史的な要請として示されているのである。哲学から信仰への転回は、清沢自身の歩みであると同時に、明治期の仏教思想が進むべき歩みでもあったのだ。そうである以上、「試稿」を中心に展開される「他力門」哲学の意義を見積もるためにも、明治期の哲学・思想史的文脈からの理解が不可欠なのである。

なお、以上のような観点から「試稿」を読解し、清沢の宗教哲学に光をあてようと試みる場合、多くの基礎的な調査・研究が必要となる。基礎資料の整理等の地道な作業こそが、新たな清沢満之の宗教哲学研究を切り開くのではないか。そしてそのことが、ひいては清沢満之の現代的意味の究明に繋（つな）がるのではないか。そうした期待をもって、今後の研究会を進めていきたい。

研究会の様子

とは、「〝真実の世界〟に生まれようと願いなさい」という、阿弥陀の呼びかけです。あらゆる人々に開かれた、本当に平等な世界に生まれたい、という願いが、私たち自身の底を破って湧き起こってくるのです。「称我名字」とは、「私が『仏』となるときとは、誰もが私の『名』―南無阿弥陀仏―を称えるときである」というのです。「下至十声」とは、「南無阿弥陀仏」と称えることがたとえ十回程度しかできない人であっても、というのです。「下至」とは、「十声」、つまり十回の念仏すらできない人であっても、あるいは「南無阿弥陀仏」の声を聞き、その名をただ信じる人であっても、ということです。

「南無阿弥陀仏」の名のもと、その願いを受け取って生きる人が、阿弥陀のこの誓いからもれたり、見捨てられたりしてしまうことは決してない、ということを示しているのです。「乗我願力」の「乗」とは「乗りなさい」ということであり、これは「智慧」です。智慧とは、阿弥陀如来がその「願力」に乗せてくださるのだと「知りなさい」、ということです。阿弥陀の願いのはたらきに乗って阿弥陀の世界に生まれるのだと、その呼びかけのままに「知る」のです。「若不生者　不取正覚」とは、「この誓いを信じる人は、私の願いが実現した世界に必ず生まれるのだ。この願いが果たされないなら、私は決して『仏』にはならない」と、阿弥陀が自らお誓いになった言葉なのです。

原文

また曰わく、「言摂生増上縁者　如無量寿経　四十八願中説　仏言若我成仏　十方衆生　願生我国　称我名号　下至十声　乗我願力　若不生者　不取正覚　此即是願往生行人　命欲終時　願力摂得往生　故名摂生増上縁」（観念法門）文

「言摂生増上縁者」というは、摂生は十方衆生を誓願におさめとらせたまうともうすこころなり。「如無量寿経　四十八願中説」というは、如来の本願をときたまえる釈迦の御のりなりとしるべしとなり。「若我成仏」ともうすは、法蔵菩薩ちかいたまわく、もしわれ仏をえたらんにと、ときたまう。「十禁戒を受持す。禁戒を受持するがゆえに、よく禅定を修す。禅定を修するをもってのゆえに、神通を修習す。神通をもってのゆえに、よく四天下に遊ぶがごとし。かくのごとき等を名づけて自力とす。また、劣夫の、驢に跨りて上らざれども、転輪王の行くに従えば、すなわち虚空に乗じて四天下に遊ぶに障碍するところなきがごとし。かくのごとき等を名づけて他力とす。愚かなるかな、後の学者、他力の乗ずべきを聞きて、当に信心を生ずべし。自ら局分することなかれ、となり。（一九六頁「行巻」『論註』）

■「一乗海」と言うは、「一乗」は大乗なり。大乗は仏乗なり。一乗を得るは、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提はすなわちこれ涅槃界なり。涅槃界はすなわちこれ究竟法身なり。究竟法身を得るは、すなわち一乗を究竟するなり。如来に異なることましまさず。如来はすなわち法身なり。一乗を究竟するは、すなわちこれ無辺不断なり。大乗は、二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は、一乗に入れしめんとなり。一乗はすなわち第一義乗なり。ただこれ、誓願一仏乗なり。

（一九六～一九七頁「行巻」）

■智慧の念仏うることは　法蔵願力のなせるなり　信心の智慧なかりせば　いかでか涅槃をさとらまし／　無明長夜の燈炬なり　智眼くらしとかなしむな　生死大海の船筏なり　罪障おもしとなげかざれ

（五〇三頁「正像末浄土和讃」）

◆「如無量寿経中　四十八願中説」／如来の本願をときたまえる

■「深心」と言うは、すなわちこれ深信の心なり。また二種あり。……二つには決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず。

（二一五～二一六頁「信巻」「散善義」）

◆「願生我国」／安養浄刹にうまれんとねがえ

■「至心回向」というは、「至心」は、真実ということばなり。真実は阿弥陀如来の御こころなり。「回向」は、本願の名号をもって十方の衆生にあたえたまう御のりなり。「願生彼国」というは、「願生」は、よろずの衆生、本願の報土へうまれんとねがえとなり。

（五三五頁『一念多念文意』）

◆「下至十声」／十声にあまれるものも聞名のものをも往生にもらさずきらわぬ

■智昇師の『集諸経礼懺儀』の下巻に云わく、深心は、すなわちこれ真実の信心なり。自身はこれ煩悩を具足せる凡夫、善根薄少にして、三界に流転して火宅を出でずと信知す。いま弥陀の本弘誓願は、名号を称すること下至十声聞等に及ぶまで、定んで往生を得しむと信知して、一念に至るに及ぶまで疑心あるこ

『尊号真像銘文』試訳㉕

「善導大師の銘文」（三）

「南無阿弥陀仏」の六字の釈に引き続いて、善導の銘文が語るのは念仏するこの利益（「増上縁」）である。曰く、阿弥陀の本願力は念仏の人を包み、分け隔てなくその世界に生まれさせるのだ、と。ここで私たちは、「乗」を「智」と読む、不思議な文に出会う。

言うまでもなく、「智」とは仏の智慧のことだ。仏教であるとは、すべて、この智慧を目指すということだ。言い方を変えるなら、それは私たちの日常の「知」ではない。情報が効率的に、迅速に世界中を行き交う現代、「知」もまた私たち自身の手につかみ取られ、所有されるものとなった。それは当然、知る私たちを前提としてそこに付加される知であって、私たち自身の存在の謎を問うことがない。そうではなく、私たち自身に相即し、それに丸ごと応答する智。親鸞はその智を「乗」の一字に読んだのだ。

「智」や「知」のそもそもの字義は、「神に祈り、誓約する」意だという。親鸞において仏の智とは、ただ何かを知ることではない。その背後に仏からの「知れ」を聞き取るところの「知る」である。智は知ったつもりの「我」を捕えて、その深淵へと突き返す。「願力にのせたまうとしるべし」。智が照らし出すのは前方ではなく、私たちの足下なのだ。

（元研究員　内記洸）

現代語

「言摂生増上縁者」の「摂生」とは、阿弥陀如来の誓いの心はどこまでも深く、あらゆる人々を誰一人区別することなくおさめ取ってくださるのだ、というのです。「如無量寿経　四十八願中説」とは、この「摂生」こそ、『無量寿経』に本願として説き出された、お釈迦さまの教えにほかならないのだと知りなさい、というのです。「若我成仏」とは、法蔵菩薩が自ら誓いを立てて、「私は必ず『仏』になろう。そのときには……」とおっしゃっている言葉です。「十方衆生」とは、異なる時代に生まれ、それぞれさまざまな境遇を生きなくてはならないすべての人々、つまり私たちです。「願生我国」方衆生」というは、十方のよろずの衆生なり。すなわちわれらなり。「願生我国」というは、安楽浄刹にうまれんとねがえとなり。「称我名字」というは、われ仏をえんに、わがなをとなえられんとなり。「下至十声」というは、名字をとなえられんこと、しも、とこえせんものとなり。下至というは、十声にあまれるものも聞名のものをも往生にもらさずきらわぬことをあらわししめすとなり。「乗我願力」というは、乗はのるべしという、また智なり。智というは、願力にのせたまうとしるべしとなり。願力に乗じて安楽浄刹にうまれんとしるなり。「若不生者　不取正覚」というは、ちかいを信じたる人、もし本願の実報土にうまれずは、仏にならじとちかいたまえるみのりなり。

（『真宗聖典』五二一頁）

《参考》（ページはすべて『真宗聖典』）

◆摂生／十方衆生を誓願におさめとらせたまう

■弘願と言うは、『大経』の説のごとし。一切善悪の凡夫、生まるることを得るは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗じて、増上縁とせざるはなきなり、と。

（一七六頁「行巻」「玄義分」）

■真実信心をうれば、すなわち、無碍光仏の御こころのうちに摂取して、すてたまわざるなり。「摂」は、おさめたまう、「取」は、むかえとると、もうすなり。おさめとりたまうとき、すなわち、とき・日をもへだてず、正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり。

（五三五頁『一念多念文意』）

となし。かるがゆえに深心と名づく、と。已上

『経』に「乃至」と言い、『釈』に「下至」と曰えり。「乃」「下」その言異なりといえども、その意、これ一なり。また「乃至」とは、一多包容の言なり。

（一九一～一九二頁「行巻」）

■「乃至十念」ともうすは、如来のちかいの名号をとなえんことをすすめたまうに、遍数のさだまりなきほどをあらわし、時節をさだめざることを衆生にしらせんとおぼしめして、乃至のみことを十念のみなにそえてちかいたまえるなり。

（五一二頁「大経銘文」）

◆「乗」「智」／願力に乗じて安楽浄刹にうまれんとしる

■当にまた例を引きて、自力・他力の想を示すべし。人、三塗を畏るるがゆえに、

第13回
「親鸞仏教センターのつどい」を開催
（2016年4月18日）

４月18日、第13回「親鸞仏教センターのつどい」を開催した。移転した親鸞仏教センター新施設の仏間において第一部の「おつとめ」、その後、会場を学士会館（千代田区）に移し、第二部の記念講演と交流懇談会を行い、さまざまな分野の有識者約60名が集った。

記念講演では、親鸞仏教センター設立当初から関わりをいただいている東京大学大学院人文社会系研究科教授の下田正弘氏が、「称名念仏と浄土―現代の思想的課題からの照射―」の講題のもと講演を行った。

下田氏は、仏事の場で浄土を語ること、称名念仏の声が消えていることに警鐘を鳴らし、「称名」と「浄土」における思想的課題を語った。そのなかで、トラウマ（心的外傷）の研究から見えてくる課題や、哲学的考察から問い直される課題を示唆したほか、あらゆる出来事から常に遅れている人間の現存在、仏を声として継承してきた仏教の歴史、往生の課題など、さまざまな見解を述べ、「思想的課題における先人の検証を、この身で受けとって開き出していくことが私たちに課せられている」と結んだ。

続いて、本多弘之所長が「深層意識の自覚化」と題し講演を行い、親鸞仏教センターの歴史を紹介するとともに、無明性を生きる人間存在を仏の教えにふれさせる『大無量寿経』の本願、その体である名号、そこに願われる浄土について、親鸞思想にたずねた。また、往生の課題から如来の欲生心について詳説し、「深層意識に気づかない現代を生きるわれわれにとって深層意識を自覚することが教えを聞く大切な方向性である」と語った。

引き続き行われた交流懇談会では、列席いただいた有識者の方々から、当センターの活動に対する激励の言葉をいただくなど、ご縁ある方々との交流をさらに深める場となった。

※記念講演の詳細は、『現代と親鸞』（第35号・2017年６月１日号）に掲載の予定です。

リレーコラム

「近代教学の足跡を尋ねて」第８回（麟祥院）

湯島駅を降り、切通坂を上って進んだところに、麟祥院（りんしょういん）はある。当センター新施設にほど近いこの禅寺は、清沢満之が最初の哲学講義を行った場所でもある。

明治20年９月、麟祥院内の建物を借用して私立学校哲学館（現東洋大学）が設立された。館主となったのは、東本願寺留学生として東大哲学科を卒業したばかりの井上円了。そしてもう一人の専任教員は、当時、第一高等学校に出講しつつ東大大学院にも籍を置いていた徳永（清沢）満之であった。「哲学諸科ヲ教授シ専ラ速成ヲ旨トス」という哲学館には、近代化へと進む明治の日本において、哲学や宗教、仏教の役割に期待する多くの学生が集まった。麟祥院に設けられた27畳半の教場で、徳永満之は哲学や心理学の講義を担当した。その講義の一部は『清沢満之全集』で現在も読むことができる。彼らはいかなる問題と格闘し、いかなる思いを抱いて哲学館に集っていたのだろうか。湯島の地に居を移した当センターから、そのことを問うていかなければならない。（長谷川）

東洋大学発祥之地

行事日程のご案内

■親鸞思想の解明

日　時：2016年９月　　休　講
　　10月４日（火）18時30分～20時30分
　　11月８日（火）18時30分～20時30分
会　場：東京国際フォーラム　ガラス棟（Ｇ棟）

■ご命日のつどい（毎月第２金曜日）

日　時：2016年９月９日（金）10時～11時30分
　　10月14日（金）10時～11時30分
　　11月11日（金）10時～11時30分
会　場：親鸞仏教センター仏間

上記共に、事前申込み不要・無料です。

あとがき

▼今号には井手英策氏をお招きした「現代と親鸞の研究会」を掲載している。氏の研究会は大変なインパクトがあった。“どうにもならない経済”の問題としかとらえていなかったが、次第に氏の掲げたテーマ通り“尊厳”と“思いやり”を考えれば“どうにかしていくべき日本経済”なのだという考えの転換を自然にさせられた。ひとくちに尊厳や思いやりといっても個々が感じているそれらは違うかもしれない。思いやりをもった“対話”がその差を軽減する唯一の手段ではないだろうか。わが身を振り返り、“対話”というものをもっと自身の問いとして考えたいと感じた。（大谷綾）